



月刊 千葉動力車

91.3 ダイ改阻止強制配転粉碎 第二波ストにたちあがろう!

動労千葉は、二月五日、九一・三ダイ改阻止闘争の第一波一二時間ストを一五〇名が突入してうちぬいた。JR東日本当局は不当にも「一旦提案したものは、一切変えない」という対応に終始

本格的反撃のはじまり

九一・三ダイ改闘争は、なによりも国鉄分割・民営化という歴史的大攻撃と、それから四年間の合理化攻撃をとおして、現場で働く労働者にとつて耐えがたいまでにのしかかる労働強化と、分割・民営化以来今も続く組合差別・選別など異常極まりない労務支配に対する、

JRの異常さをあばく

さらにストライキは、団体交渉を否定するばかりか、労働組合の存在そのものを否定し、鉄道事業の公共性・公益性をかなぐりすて、ただひたすらJR総連以外の組合つぶしに奔走するJR東日本の異常性・違法性を一定程度社会的にあばきだした。

した。われわれの切実な諸要求の実現にむけて、さらにはJR当局-JR総連革マル一体となった「JR体制」をうち破るためにも、第一波ストをひきついで、第二波ストに全力で総決起しよう!

初めての本格的反撃の闘いであった。

とりわけ、JRが今までの本格的な大合理化攻勢にうって出ようとする時、職場の諸要求をかかげてストライキで反撃にたちあがったことは、今後の闘いの方向をさし示したといえる。

すら拒否する対応のなかに、今日の「JR体制」の異常性がはつきりとみてとれる。JR総連革マルと結託したスト破り体制と、それに依拠した労務政策優先の姿勢は、日本のどこを見わたしても他にこのような会社を見ることができない。

われわれは、これを決して過少評価することなく、全力をかけて闘わなければならぬ。

JR体制の危機と矛盾

又、今次ストライキは、JR当局とJR総連革マルの結託体制「JR体制」への総反撃のはじまりの合図となった。

JR西労組のJR総連からの脱退表明は、それ自体が戦闘的なものでないにしろ、JR総連の革マル支配体制の危機と矛盾が、おしかくすことのできないところまで突き進んでいることを示して

国鉄労働運動の展望ひらく

このように、二・二五ストは、激動化・流動化する情勢のなかで、ストライキで闘うことの意義をあらためて鮮明にさせた。JR側の不当・不法、ストライキ権さえも力で押しつぶそうとする姿に對しては、何度でもストライキで闘う以外にないのだ。ストで闘う時、JRの側の危機と矛盾も次々とバククされる。

このせめぎあいに勝利していくなかにしか、われわれの闘いの前進もないのだということを、今一度しっかりと意識せよ。分割・民営化過程以来の闘いの連続的な

さらに第二波へ

いる。「一企業一組合」の名のもとに、JR総連を革マルが支配することが、成り立たないところまでたたきこんだのだ。

ここには、分割・民営化過程からの動労千葉をはじめとする闘う国鉄労働者の奮闘が、敵の「一企業一組合」攻撃をはね返していることを確信をもって確認できる。

かに、今日の勝利的地平がうちたてられていることを、あらためて確認しよう。

しかし一方で、今次ダイ改でかかげた要求が、一歩も解決していないことも事実であり、津田沼支部に對しては、役員・活動家など二〇名にもおぼる、支部解体を狙った大量不当配転がかけられてきている。

敵の側の危機と矛盾の激化は、より一層の動労千葉(そして国労、さらには鉄産労も)解体攻撃の激化としてあらわれてくる。ここが胸突八丁、正念場として第一波ストの成果の上に、一六日の第二波ストライキにむかって、全支部全組合員の団結をうちかためて闘いにたちあがろう!



何と驚くべきスト対策
正門前に車を止め、
賃金を支給するJR
勝浦支部組合員の怒りは爆発した!